

RRRRTTTT 研究所図書室

対応者：RRRR 日本学研究所図書室担当

訪問者：安江明夫（資料保存研究者、EAJRS 和古書保存 WG アドバイザー）

1 蔵書・概況

RRRR の図書館は現在、改増築中で、所蔵資料の大半は別所保管施設に収蔵されている。これらはアクセス不能であるが、一方、一部は本部施設の地下に臨時書庫を設け、そこに配置している。

TTTT 研究所図書室所蔵和古書の大半（数百点）は、この本部施設の臨時書庫で収蔵しているため、そこを視察し、説明を受けた。

2 全体状況

臨時書庫の環境は、視察時点では良好である。しかし、温度・湿度には日々の変動、季節変動もあるので、環境把握、すなわち温度・湿度測定は必要である。

和古書は鍵付き金属性キャビネットと通常書架に収納されている。帙入り和書は、縦置き、そうでない和書はすべて横置きに排架されており、物理的状态はすこぶる良好である。

保存箱収納の図書・書類があり、その容器はアーカイバルな素材（長期保存に適した素材）を使用している。この点も評価できる。

3 検討課題

RRRR 図書館の蔵書は、目録含め、図書館システムとして全体的に統括されている。一方、資料管理は、図書館全体に関わる蔵書以外は、地域別・分野別の所管となっている。和古書保存に関わる施策・課題も、それゆえ、図書館全体に対する期待・要望と、日本部門への個的提案の2つに分かれる。

まず図書館全体に対する期待・要望を記す。

1) 環境

現在の保管場所は、本部施設の臨時書庫も別所の保管場所も暫定的なものである。とはいえ、この状態がしばらく続くのだから、本部施設の臨時書庫、別所保管施設の両方で温度・湿度の常時測定をする必要があるだろう。これはデータロガー（温度・湿度ロガー）を用いれば、簡単にできる。

増改築後の図書館も同様で、そうした環境管理が新装図書館に組み込まれているか、確認する必要がある。紫外線防止照明の設置などの紫外線防止策も同様で、工事内で実施す

れば簡単なことが、工事後では費用がかさばることになる。図書館資料のための環境整備（温度、湿度、照明、セキュリティ）として、何がどのように計画されているか、もし未確認であれば、見極める必要がある。

2) 暫定期間中のリスク管理

十分に体制が整備されていると考えるが、暫定期間中の別所保管施設について、念のため以下を付す。

暫定期間中、保管場所での蔵書の盗難、放火、漏電、漏水、虫・カビ害発生等を防ぐため、定期的なパトロールと資料点検が必要である。この点の措置を確認していただきたい。

3) 保存部門の組立て

館内に補修、保存箱作製の場所・施設があり、担当者がいるのは心強い。また、現在、防災計画等担当の司書がいて、その人が図書館改増築計画に加わっている。これも大層、優れた運営である。

ただ、同司書（達）の蔵書保存に関する責任範囲・守備範囲はどこまでか、それは事務分掌上、どのように記されているかを確認する必要がある。

もし上記の司書（達）の責任が防災計画、虫・かび対策、図書館改増築計画関連までであるなら、それを拡張して資料保存の全体（あるいはコレクション・ケアの全体）を担当するように組み立て直してはどうか。

加えて、上記司書（達）を中核に、館内保存チーム（あるいは委員会）を設けることも考えられる。同チームは、防災計画、虫・かび対策、図書館改増築計画関連等のほか、環境整備、補修・容器作製の年間計画、保存のための職員・利用者教育（資料の取り扱いなど）、貴重書展示及び展示のための館外貸出し規則類の制定、マイクロフィルム等のフィルムベース資料の管理など、コレクション・ケアの全体に関わることが期待されよう。資料デジタル化計画及びデジタル・ファイルの管理を担当するのも一案である。こうした蔵書のコンサベーション全体を担当（統括）するチームが活動すると、蔵書の保存・保全が、体系的、計画的になり、蔵書の保存マネジメントが大きく向上する。

本部施設の臨時書庫を見ると、和書部門は優れているが、他部門の図書では、横置きが望ましい大型・重厚な図書が縦置きで斜めに傾いているなどが散見された。単純なことだが、これも図書館全体として注意、修正すべき資料保存の課題である。

貴重資料、重要資料、痛みのある資料を利用者が複製（複写）する場合にも、全館的な資料取り扱い規則が必要だろうが、これもコンサベーション・チームの任務となりうる。

また、和書受入れの際に生きた虫を発見したケースを聞いた。シバンムシなどの害虫は一旦、書庫に入ると、そこで繁殖し、なかなか発見しづらい。和書のみならず、全館的に「図書（特に古書等）受入れ」の際には、虫・カビ点検の徹底が重要である。これも館内保存チームが統括すべき項目の1つである。

電子記録の保管・保存についても、分野別・地域別ではなく、全館的に取り組むことが必要となってこよう。

次に日本部門について。

1) 定期保存点検

図書館改増築後でよいが、年に1度程度の「和古書定期保存点検」を行ってはどうだろうか。(参考に EAJRS 和古書保存ワーキング・グループで作成準備中の「定期保存点検」案を添付する。) 和古書コレクションに限れば、1回につき一人半日程度で実施できる。和古書の保存・活用における定期的「健康診断」の利点は大きいと考える。

(なお、補記すると、添付の「(特別資料保存のための) 定期点検表 (案)」 「(特別資料保存のための) 定期点検《ガイド》(案)」は、大筋では、和古書等のみならず、他のどの特別資料群にも適用可能である。両文書は本年7月頃に完成し、次にその英訳版を作成する予定である。完成した文書は EAJRS 和古書保存 WG ブログに掲載される。)

2) 目録整備

コレクション中に、一部、目録未整備資料があるとの説明を受けた。そのなかに和古書が含まれるかどうか不明だが、いずれにしても目録不在では資料の検索、利用ができない。図書館増改築後にならうが、これらの速やかな目録整備を期待したい。

3) コレクション案内・紹介

RRRRTTTT 研究所図書室のコレクション構成は、日本研究者の研究主題による収集・蓄積、寄贈等に依拠する面が強い。であれば、これら全体コレクション中の「資料群」の紹介が、その分、一層、重要となるのではないかと。図書室ウェブ・ページにエフェメラ・コレクションや LK コレクションの短い紹介、図書館目録に丁寧な記述があるなど、これまでの努力が伺える。この点に深い敬意を表すが、今後、さらに、「M 家旧蔵文書」等を含め、資料群の概要を示す一層、丁寧な案内・紹介が期待される。LK コレクションについては、各種関連著作(日本語著作含め)の紹介、EAJRS 年次大会での RRRR 日本図書室担当者の発表へのリンク付けなども考えられるのではないかと。

要は、グーグルなどの検索エンジンで、各コレクションの名前等が種々のターム(キーワード)で検索可能となること、それによりこれらの文献を必要とする研究者のアクセスが高まること、である。

この場合、和古書や日本の古文書については、資料の言語的性質上、同国の言語、日本語の両方を検索言語として視野におくべきだろう。例えば、RRRR 寄託古文書の M 家旧蔵文書が日本語で解説、紹介されれば、日本語を解する研究者の資料探索、研究の一助となる。(この点は韓国資料、ロシア資料、ネパール資料等についても同様である。)

重要なコレクションを「宝の持ち腐れ」に陥らせないための創意工夫が重要で、その点に関する TTTT 研究所のこれまでの長年の努力を多としつつ、今後の一層の向上を期待したい。

既に着手されている資料デジタル化もその一方策である。資料デジタル化では、特に他の機関・団体・プロジェクトとの連携協力が鍵となるのではないかと。

添付：EAJRS 和古書保存ワーキング・グループ作成「(特別資料保存のための) 定期点検表 (案)」及び「(特別資料保存のための) 定期点検《ガイド》(案)」

SSSS 館図書室

対応者：SSSS 図書室司書

訪問者：安江明夫（資料保存研究者、EAJRS 和古書保存 WG アドバイザー）

1 蔵書

SSSS 図書室全体の蔵書数は約 1 万冊。（内訳は和書約 7 千冊、洋書約 3 千冊）ほかに雑誌・紀要等。和書約 7 千冊のうちに、同図書室が重視している江戸期、明治期の図書が数百冊あり、今回の訪問調査は主とこの資料群を対象とした。（以下、「特別資料」と言う。）

2 全体状況

特別資料は、その大部分が鍵のかかる木製扉付き書架に収納されている。つまり、やや大きい木製保存容器に収納されていると同じで、保管環境としてはすこぶる良い。セキュリティー上も優れている。

モノとしての資料群の状態は普通である。紙質の良くない明治期図書で用紙変色の見られるものがあるが、これは特別のことではない。

排架は、和装本は一部、帙入り図書は縦置きだが、他は横置きされている。この点も評価しうる。

目録は整備されているが、特別資料の利用は少ないと伺った。江戸期古書で『欧州所在日本古典籍総合目録』（ピーター・コーニッキ編）に記載のものあるとの説明を受けた。

3 検討課題

1) 環境・保管

書庫、閲覧室の温度・湿度環境については、特段の問題はないと理解した。とは言え、温度・湿度環境は資料保存上の重要なファクターⁱであり、通常家庭用温湿度計でよいから、それを閲覧室の書棚と書庫の書棚に配置して、時々、温度・湿度を確認するのが良いと思われる。高温、高湿、急激な温度・湿度変化が見られるようなら、データロガー（記憶装置付き温湿度計）の配置を考慮すべきであろう。

特別資料の保管状態は全体としてよい。しかし、ごく一部の書棚に埃が見られた。同箇所ⁱⁱの書棚清掃が必要である。

大部分の和古書が横置きなのは良いが、なかに積み重ねにより、上部のやや大型和装本が平らでない（歪んで排架）ケースが見られた。排架の改善が必要である。また、和古書の置き方・並べ方を、もう少し丁寧に（資料に優しく）することを考えていただきたい。

特別資料ではないが、縦置き洋書でブックエンドがないため、斜め置きになっているものが見られた。これはブックエンド等を使用して真っ直ぐ縦置きに直す必要がある。また、書架上、図書が窮屈に（ぎっしりと）排架されている箇所が見られた。あまり窮屈だと、出し入れの際に図書を傷め易いので要注意である。（これらの図書取り扱い上の基本的留意事項については、ハーヴァード大学図書館保存部作成資料ⁱⁱが参考になる。）

閲覧室の人工照明は紫外線防止タイプでないとの説明を受けた。閲覧室収蔵の資料は特別資料ではないが、とはいえ、資料の保管・保存上は、紫外線防止タイプの採用が望ましい。その点に留意し、蛍光管取替えの際に、順次、紫外線防止タイプを採用してはどうかだろう。

2) 取り扱い

和古書を新たに受け入れることは少ないようだが、受入れの際には、虫の生息、カビ繁殖が見られないか、厳しく点検することが大切である。虫害が発見された時は、無酸素法や冷凍殺虫法、カビ害の場合はアルコール消毒等が必要となる。

3) 目録

カード目録が存するが、一度、現物との照合（点検）が必要と思われる。また、図書室所蔵和古書の『欧州所在日本古典籍総合目録』（ピーター・コーニッキ編）への記載有無の点検・確認も必要であろう。

4) 利用

特別資料の利用が少ないのは普通のことであり、理解できる。とは言え、それを保存するのは「現在と将来の利用を保証するため」である。特別資料が価値あるものなら、その利用促進（展示を含む）が課題となろう。目録整備、OPAC化、総合目録への編入、資料紹介、資料展示等がその手段として考えられる。どのような方策をとれば、所蔵の特別資料が価値を生み出すか、それを必要とする研究者にアクセスしてもらえるか、を思慮することを期待したい。

5) アーカイブズ

SSSSの文書・記録類（アーカイブズ）が、設計図面等がSSSS館長室に保管されている以外は、残されていないと言う。この点は残念だが、今後の重要な課題と理解した。

アーカイブズ管理は必ずしも図書室の本来的任務ではないが、SSSSにそれを担う部署が他にない以上、それを図書室の任務・担当と考えても良いのではないか。そのために、以下を提案する。

i) 日本大使館、国立公文書館などに残されたSSSS関連記録を調査し、必要な記録は複製してSSSSに集積・保管すること。それには、これまでに著された単行本や論文などが参考になる。

ii) これまでSSSSに関わった日本人研究者・元学生等に呼びかけ、あるいは問い合わせ、関係記録・写真・新聞切抜き・書簡等を収集（複製でも良い）してはどうか。過去のSSSS滞在者名簿だけでも重要な歴史資料となる。

iii) 現在の記録を今後（将来）のために遺し、活かすため、SSSSにおける記録管理を制度化（ルール化）してはどうか。遺すべきものを遺し、捨ててよいものは用向きが終了した時に、処分する。遺すものは、一定期間後、図書室に移管し、そこで管理する。（これらの記録・文書類は、原則、非公開でよい。）

日本と同国との学術交流に重要な役割を果たしてきた（そして果たしている）SSSSのアーカイブズ（記録・文書等）は、貴重な歴史資産である。

6) 収集

特別資料からは離れるが、日本に所在する同国との関連機関・団体（約30団体）の刊行物を受贈により収集し、保管・提供するのはどうだろうか。各学会は年報、会誌等を編集・刊行している。両国間の文化・学術交流の観点から、SSSSにとっても、各学術団体にとっても意義あることはでないだろうか。SSSS在住者は、関連学会の潜在的会員とみなしうるだろう。

4 補記

特別資料の保存・利用に関係するので、以下の点を補記しておきたい。

SSSS 図書室の運営は、財政事情により、蔵書構築、体制整備等で困難な面がありそうである。それを打開するため、SSSS 図書室の使命・役割を再検討しては如何だろうか。

その一環として、まず、SSSS 図書室の第一の顧客（利用者）は誰か、と問うてみる。これはSSSSの居住者（日本人研究者・学生+非日本人研究者・学生）と措定できよう。では第二の顧客（利用者）は誰と措定できるだろうか。この問いには、1) 同国在住日本人、2) 同国の日本研究者、など、幾つかの答えがありそうだ。1)、2)のすべてとの答もありうる。図書室の運営、サービス方針、蔵書構築計画、特別資料管理計画等は、「顧客は誰か」により違って来るから、この点（第一の顧客、第二の顧客）を突き詰めて考えることが重要ではないか。

また、図書室を単に「図書利用の部屋」とするのではなく、今まで以上に、各種情報資源のハブとして、ILLやレファレンス・サービス、レフェラル・サービスに注力する。さらには、閲覧時間後に種々の文化・学術セミナーを開催する、などを考えてはどうか。

セミナーなどは、顧客を誰と考えるかによりテーマ、方式等が異なってくるが、図書室を活性化し、図書室の存在理由をアピールする契機になる。それは延いてはSSSSの存在価値を高めることにもなる。

SSSSは1929年の創設で、間もなく90周年を迎える。そうした画期を捉えるなどして、図書室の発展をはかり、財政基盤を整備する。そのために種々の助成・支援を仰ぐのはいかがだろうか。SSSSアーカイブズの設置などは、創設90周年に相応しい事業ではないか。

なお、SSSSが所在する都市圏内には、和古書含め日本資料を収集・所蔵している図書館が数館ある。言うまでもなく、こうした図書館との連携協力は、利用者サービス、目録整備、蔵書構築、和古書デジタル化等で重要である。協力し合って、各館の存在理由を高め、業務の効率化、サービスの充実を図ることを期待したい。この点から、SSSS図書室も、同国アジア関係司書ネットワーク等への参加を考慮して良いのではないだろうか。

i ハーヴァード大学図書館保存部作成資料：‘15 Ways to Save Harvard’s Collections. A Guide for People Who Works in Libraries’, http://www.library.harvard.edu/sites/default/files/HLPS_15_ways.pdf.

ii 添付の2ファイルを参照のこと。